

被爆後描いた希望の絵

本川小児童の48点を修復

広島原爆の爆心地近くにある本川小学校(広島市中区)の児童が約60年前、米田から贈られた文具への返礼として描いた絵など48点が修復され、米田・ワシントンのユニトリアン・オールソウルズ教会で5日(日本時間6日)から、展覧会が開かれている。希望にあふれた作品は来場者の感動を呼んでいるといい、作品を制作した卒業生たちは「被爆後に国境を超えて生まれたきずなを知ってほしい」と話している。



田辺さんが描いた、復興する広島町の並み
ユニトリアン・オールソウルズ教会提供

米で感動の展覧会

本川小は爆心地の西約4

100人で、児童、教師ら約410人が原爆で死亡。同教会の牧師らが1947年、クレヨンや鉛筆などの文具を贈り、児童が翌年に制作した絵や習字が同教会に返礼として届いた。60年を経てカビが生えるなどしたため、2006年から米田在住の舞台芸術家、重藤マナレ・静美さんらが修復、07年12月に完了した。

子どもたちの絵は美しい山河や着物姿の女の子など、希望にあふれたものばかり。原爆ドームや復興する町並みを描いた、田辺操子さん(69)(広島市西区)は

「新しい平和な時代に向かう明るい気持ちがあったか

ら、きれいな色の絵になったのでは。絵を保管してくれていたなんて感動します」と語った。

日吉祥江さん(69)(東京都渋谷区)が描いたのは満開の桜。日吉さんは「70年は草木が生えないと言われた広島に花が咲いたことを伝えたかった」と話している。

傷む恐れがあるため、展覧会では、多くが高精度複写の展示だが、2点は実物で、初日は約400人が訪れた。来場者の中には「原爆が落ちたばかりの広島の子どもたちが、こんなに生き生きとした絵が描けるなんて」と、感極まって涙ぐむ人もいるという。日本でも公開予定で、重藤さんは「今の子どもたちに、夢と希望の詰まった絵から平和の尊さを感じてほしい」と話している。

本川小平和資料館では作品のパネル展示を行っている。開館時間は平日午前8時半～午後5時。

「平和の尊さを感じて」